J. Jpn. Soc. Soil Phys.
土壌の物理性
No. 125, p.1 ～ 2 (2013)

巻 頭 言
Foreword

誰に何をどう見せるか

中辻 敏朗 [1]

小生の職場では，毎年 8 月に「北見農業試験場公開デー」を開催している．この催しの目的は「小中学生や一般市民および農業関係者など地域の皆様に，北見農業試験場の圃場施設や試験研究内容等を公開することにより，北見農業試験場やオホーツク農業に対する理解を深めていただく」と開催要領には記されている．何ともお役所的な文言が並んでいるが，要は大学のオープンキャンパスに類したものとお考えいただければよいかもしれない．

公開デーなので，できるだけ多くの人に来ていただきたい．言葉は良くないが，集客力のある出し物はなんだろうか．まずはなんと言っても食べ物の提供だ．幸い北見農業試験場には小麦，馬鈴しょ，たまねぎの新品種を育成するセクションがあり，素材は豊富にある．そこで，いずれも当場育成の，春まき小麦「はるきらり」を使ったバターロール，ポテトチップ用馬鈴しょ「オホーツクチップ」のポテトチップス，生食用（一般青果用）馬鈴しょ「ゆきつぶら」のふかしいも，多収極早生たまねぎ「収太郎」のオニオンフライの 4 品目を無料試食として提供することにした．

しかし，来場者の方々にお腹を満たして帰っていただくだけでは開催要領に掲げられた本来の目的，つまり，皆さんに「北見農業試験場とオホーツク農業に対する理解を深めていただく」ことが達成できたとは言えない．そこで，試食品と一緒にカラー刷り写真入りの品種解説パンフレットを配布した．また，試食コーナーのテーブル横に数枚の品種解説パネルを展示して，パネル説明担当研究員も配置した．来場者の方々からは担当研究員に対し「試験場っていろいろな作物の品種を開発しているんですね」，「家庭菜園で作りたいのだけど，種いもは手に入るのですか？」，「この品種はどんな料理に向くの？」などの感想や質問が寄せられ，多少なりとも興味を持っていただけたようだ．

公開デーではこの他に，子供向けの遊びコーナー（ここでもちょっと農試っぽく「土で絵を描こう」なんて企画もある），農業に関するクイズに答えて場内を一周するクイズラリー，作物の栽培法や病害虫の悩みに研究員が答える畑作園芸相談コーナー，試験圃場見学バスツアー，農業機械の展示なども行った．

ふたを開けてみると，天候にも恵まれ，11 回目となる今年の来場者は 297 名（うち子供 72 名）で，過去最多となった．来場者の約 4 割にお答えいただいたアンケートによれば，来ていただいた方の職業は，主婦，会社員，幼稚園・小学生，農業，公務員などと幅広く，年齢層は 60 歳以上が 4 割とやや多いものの，10 歳未満から 50 歳代までまさに老若男女にお越しいただいた．来場者の職業や年齢層がもっと限定されれば，出し物の内容も絞り込める可能性はあるが，このような現状なので，どうしても万人受けする総花的な内容にならざるを得ない．対象者をあまり狭く限定せずに，北見農試の成果やオホーツク農業の現状をどう見せるか，これが非常に難しい．

藤沢晃治氏の著書『「分かりやすい表現」の技術（講談社ブルーバックス）』には，意図したことを適切に伝える（見せる）ための 16 のルールが解説されている．そのうち，「受け手のプロフィールを設定せよ」，「受け手の熱意を見極めよ」，「大前提の説明を忘れるな」，「欲張るな．場合によっては詳細を捨てよ」，「情報に優先順位をつけよ」とのルールは，対象者のバックグラウンドや関心の程度を明確に想定し，精選された情報をうまく並べて見せることの大切さ



Photo. 1 試食品提供の様子（北見農試公開デー）．

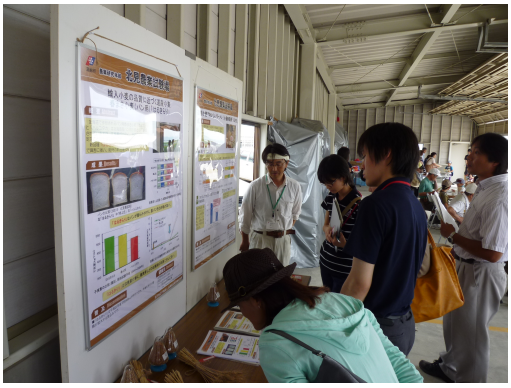


Photo. 2 品種解説パネルと研究員による説明（同）．

[1] 北海道立総合研究機構北見農業試験場

を指摘している．一方，公開デーでは，大人から子どもまで，専門家から初心者までを対象に，広く浅く（もちろん深い方が良いが）農試の仕事を見せることが使命なので，これらのルールを当てはめにくい．

小生が会誌「土壌の物理性」の編集委員長を拝命した過去 2 カ年においても，誌上で誰を対象に何をどのように見せるか，大いに悩んだ．当時は投稿論文数が減少傾向にあったため，編集委員会や事務局での論議に基づき，多くの方々にご協力いただきながら，依頼原稿を中心とした特集をいくつか企画し，土壌物理に少しでも関連することならば，できるだけ幅広くいろいろな情報を掲載する（見せる）ことを試みた．元来，土壌物理学会は土壌肥料学会，農業土木学会（現農業農村工学会）の研究者を中心に，1958 年に発足した土壌物理研究会がルーツであり，農学，工学，環境科学，気象学など多様なバックグラウンドを持つ人達の集まりである．したがって，先ほどの藤沢氏の指摘はもっともであるが，対象や内容をはじめからあまり狭めることなく，ゆるい縛りで，多様な人向けの情報をたくさん掲載する（見せる）ことが，和文誌としての「土壌の物理性」の良さの発揮につながるのではないかと考えた訳である．

ただし，「見せる」の意味を愛用する新明解国語辞典（三省堂）で引いてみたところ，「どうすればうまく出来るかということを実際に演技してのける」とあるのを見つけた．なんと恐ろしい意味だろう．「実際に演技してのけ」られたかどうかは，後々の皆さんのご判断にゆだねたい．それにしても，この巻頭言もそうだが，誰に何をどう見せるかは実に難しく，勉強の連続であることを痛感している．